流星のロックマン～赤き太陽現る～

evance

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン～赤き太陽現る～

【Ｎコード】
Ｎ４７７９Ｘ

【作者名】
ｅｖａｎｃｅ

【あらすじ】
メテオＧの危機がさりスバルたちは６年生に進級しようとしていた
そんな中ヒールヴィザードによる事件が多発していた　それが４度目の地球の危機になることはだれも予想していなかった

第一話　因縁（前書き）

はじめまして　初めての投稿です　がんばっていきます。

第一話　因縁

ここは紅葉島（もみじとう）の砂浜　そこに一人の青年と一人の少年がはなしていた
「お前にはコダマ小学校へ転校してもらう」
彼の名は暁シドウ　ＷＡＸＡで働いており、ヴィザードのアシッドと電波変換することでアシッド・エースになることができる
「ん？コダマ小だって？」
髪は銀色　服は白いえりのついたシャツ　黒い短パンという容姿の少年が言った
「知ってるのあか？」
「・・・なあ　あんた星河スバルってしってるか？」
「なに！どうしてロックマンの正体をしっている！？」
「へ～　あいつが・・　まっ不思議はないか」
少年はつぶやくと海のほうを向き
「やっぱり因縁が俺たちを引き寄せたな・・スバル」

第一話　因縁（後書き）

なぞの少年　こいつの正体がわかるのはだいぶあとですね

第2話　始まりの朝（前書き）

この物語の設定はゲーム流星のロックマン3のあとということにしてます

第2話　始まりの朝

「最近　ヒールヴィザードの事件が増えているね」

食事を終え　ニュースを見ながらそういったのは星河スバル　現在コダマ小に通っており今日で6年生になる

「へっ　最近つまんないからな　肩ならしにはちょうどいいぜ」

そう言ったのはスバルのヴィザードのウォーロック　元々は星人で地球に逃亡していたのだが今ではすっかりなじんでいる

「ロック　物騒なことといわないでよ　また地球の危機なんかおこったらどうすんのさ」

彼らは電波変換することで地球を3度救ったロックマンになれる

「スバルー　委員長さんたちきたわよー」

「はーい　行ってきまーす」

「ふふ　今日　帰ってきたらスバルどんな顔するかしら♪」

第2話　始まりの朝（後書き）

読みにくいので空白あけました

第3話　6年生と一年（前書き）

なるべくペースをおとさないで書きたいですね

第3話　6年生と一年

「みんな　おはよう！」

「おはようスバル君　今日は寝坊しなかったようね」

「おはようございますスバル君　ほんと珍しいですね寝坊しないなんて雨でも降るんじゃないですか」

「おっすスバル！　ちゃんと朝飯くったのか？」

上から順に白金ルナ　最小院キザマロ　牛島ゴン太　彼らはスバルが学校へ通い始めたころのなごりか

毎朝スバルを迎えにいっているスバルのブラザーである

「みんな・・・僕ってそんなに寝坊してる？」

「してるわよ　自分のことよくわかってないのね　ほらみんないくわよ」

3人は意気揚々とスバルはうなだれながら歩きだした

「ねーロック　僕ってそんなに寝坊してる？」

「してるな」

「・・・今日から6年生なのに・・6年生か・・ロック僕たちが出会ってから一年がたとうとしてるよ」

「・・・一年か　いろいろあったな」

「うん」

一年前の自分だったらこんなふうにブラザーたちと学校に通っているなんて考えもしなかっただろう

僕は感謝した　ロック　目の前の3人のブラザー　そして初めてのブラザーにも

第3話　6年生と一年（後書き）

メテオっていつごろおきたのでしょうねすくなくとも夏休みあけだから秋ぐらいですかね

第４話　始業式は眠気をさそう（前書き）

読んだかたできれば感想よせてください
参考にしたいので

第４話　始業式は眠気をさそう

「そういえば今日転校生がくるそうですよ」
教室にはいるとキザマロが言った
「転校生？　どんな子がくるのなかしら」
「牛丼すきだといいな」
「ゴン太は牛丼がからんでればなんでもいいの？」
そんなことを話していると育田先生がきた
「お～い始業式あるからみんなならべ～」
「先生！　転校生は！？」
「はは　もう伝わってるのか紹介はあとだいくぞ～」
そうして始業式をおえるとクラスは転校生はどんな子かはなしていた
僕は始業式の校長先生のはなしが長かったせいで眠く視界がぼやけている
「みんな～　静かにしろ～」
先生がはいるとみな静かになった

「みんな知ってるとおもうがこのクラスに転校生がくることになったぞーなんと４人もだ！　そのうち２人は復学だが」

その言葉にみながまさかという顔をした

「スバル　大変だ！ハープの周波数がする！」

「え？まさか・・」

「４人とも　はいってこい」

先生がそういうとドアがひらいた

第４話　始業式は眠気をさそう（後書き）

転校生の４人だいたいわかりますよね
一人は名前だいていませんが

第5話　眠気をふきとばす転校生たち（前書き）

ここからですよある意味

第5話　眠気をふきとばす転校生たち

入ってきた４人をみて僕はいっきに吹き飛んだ

「みんな元気にしてた？　双葉ツカサです」

彼は以前もう一人の人格ヒカルを封印するため旅にでていた少年だ
前にナンスカー村で会ったがそれ以来あっていなかった

「ジャックだ　久しぶりだなおまえら」

彼は元ディーラーの一員で一度メテオＧから帰ってきたことを祝してパーティーをしたとき以来あっていなかった

「はじめましてベイサイドシティーからきました響ミソラでーす」

彼女は僕の初めてのブラザーでヴィザードのハープと電波変換することでハープノートになれる　２度ブラザーをきったが今では大切なブラザーの一人だった　彼女は人気歌手で仕事がいそがしくここ２ヶ月あっていなかった

「あ～はじめまして神上シンだ　よろしく」

髪は銀　それと対称的な黒い目　白いシャツと黒い短パンの彼をみたとき目をみはった

そして彼は僕に不敵な笑みをみせた

「わーーー！　ミソラちゃんだ！！」

「あのアイドルがこんな近くに！！」

「おかえり～　ツカサ君　ジャック」

「あの人すごくかっこいいーー！」

クラスのみなはそれぞれの反応をみせていた

「それじゃ　席だがみんなどこがいい？」

第5話　眠気をふきとばす転校生たち（後書き）

４人めの転校生の名前・・　ちょっとセンスないかな

第6話　席はどこ（前書き）

今日　すこしがんばります

第6話　席はどこ

その瞬間クラス全員（スバルを除く）の目がひかった

「ミソラちゃんどうぞこちらへ！」

「いや　俺の隣へ！」

「ぼくのところへきてください！」

しかしその争いは一瞬にして止んだ

「私　スバル君の隣で」

「「「なにいい！！」」」

「わかった　ほかの3人はどうする？」

「ぼくはどこでもいいですよ」

「俺もどこでもいいぜ」

「同じく」

席は次のとおりになった

先生

男　キ　女　ゴ　　ス・・・スバル　　ミ・・・ミソラ

ジ　委　男　女　　ゴ・・・ゴン太　ツ・・・ツカサ
女　男　女　シ　　キ・・・キザマロ　ジ・・・ジャック
ツ　ミ　ス　　委・・・委員長　シ・・・神上シン

「よろしくねスバル君」
「あっうんよろしく」
おその瞬間　転校生を除いた男子＋委員長からものすごい殺気がはっせられた
「（おのれスバルめ）」
「（名前で呼ばれてた！）」
「（いったいどんな関係なんだ！？）」
委員長からあは黒いオーラがみえている
「なんかみんなこわい・・・」

ミソラ視点

「（やったースバル君の隣だ～♪）」

「よかったわね　ミソラ」

「（うん！）」

「けど彼　難しい顔してるわね・・」

「（う～ん　確かに前のほうじっと見てるけど・・）」

スバルの前のほうをみてみると女の子がうれしそうに神上シンに学校の説明をしてた

「う～ん　まっ　いっか」

「よーし　みんな～宿題だせー」

第6話　席はどこ（後書き）

しばらくほのぼのですね

第7話　宿題（前書き）

今日で2話目です

第7話　宿題

ミソラはたのしかった　知り合いに囲まれながら学校をすごすのが

「ゴン太　本当に宿題をやったが家にわすれてきたんだな？」

「ほっ本当だぜ」

「じゃあ明日もってこれるな？」

「おっおう」

「やっていなかったら学校にのこってやってもらうぞ？」

「そっそんな！！」

あはははは

楽しいと心のそこからおもえた

そして隣ではスバルがほほえんでいる

今日から毎日がたのしみだな

～授業終了後～

「久しぶりねミソラちゃん　ツカサくん　ジャック」

「ほんと久しぶりだなおまえら」

「元気だった？」

「ひさしぶりだねみんな」

「いろいろ話したいことはあるんだけど　まずミソラちゃんなぜスバル君の隣をえらんだのかしら」

黒いオーラをだしながらたずねた

スバル達（ミソラを除く）は思わず一歩さがった

「隣に友達がいたほうがいいから♪」

「私の隣でもいいんじゃない？」

「ブラザーのスバル君がよかったの」

「「「なに！！！」」」

教室のほとんどの人間がはんのうした

「おいスバル！どういうことだ！」

「そーだ！ミソラちゃんとブラザーってどういうことだよ！」

「えっえーと色々あって・・・」

「色々ってなんだ！説明しろ！」

「うるさいわよ！あんたたち！！」

その声でみんな静かになった

「えっえーとツカサくんとジャックがかえってきたってことはそれぞれの問題が解決したんだよね？」

第7話　宿題（後書き）

おれの学校ライフもたいへんだ

第8話　それぞれの事情（前書き）

第7話の題名と更新がおくれたこと
すみませんでした　学校がいそがしくて・・・

第8話　それぞれの事情

「うん　僕はヒカルを封印するんじゃなくて和解することにしたんだ　ヴィザード　オン」

そういうとなんとふたご座のＦＭ星人ジェミニがでてきた

「「「ジェミニ！」」」

「いや中身はヒカルだよ　僕にジェミニの残留電波があったみたいでこうなったんだ」

「じゃあジェミニってよべばいいのか　ヒカルってよんだほうがいいのか？」

「どっちでもいい　まさかこうなるとわな・・・」

「ブロロッ　よろしくなジェミニ」

「よろしくねツカサくん」

上から順にロック　ジェミニ（ヒカル）　オックス　ハープが言った

「俺もいるぜ　ひさしぶりだなロックちゃん」

「「「コーヴァス！」」」

なんと倒されたはずのからす座のＦＭ星人コーヴァスもでてきた

「ジャックどういうこと？」

「俺は今ＷＡＸＡにいて復元してもらったんだ　そして暁のやつに学校には通えっていわれてな」

「へ～」

「そういえばミソラちゃん学校にかよってていいの？　歌手は？」

「私ね中学卒業まで芸能活動中止するの」

「「「「ええーーーー！！」」」」

「だから私　学校に通うならみんなのいるここがいいなと思って」

「なるほど」

すると先生がはいってきた

「みんな～　席につけ～　１年間の行事のデータおくるからな～」

その間もスバルはどこかそわそわしているようにみえた

第8話　それぞれの事情（後書き）

けれど学校の行事もおわったからけっこう更新できますよ

第9話　用事（前書き）

しばらくミソラ視点つづきます

第9話　用事

今日は学校初日なのでお昼でおわった

～ミソラ視点～

「スバル君　この後屋上にきてくれないかな？」

「ごめん　僕用事あるから」

そういうとスバルはそそくさと教室をでていった

「・・・怪しい　今日のスバル君なんかそわそわしてた」

「ほかの誰かから告白かしら」

ハープが唐突に言った

「そっ　それは困るよ　追いかけよう」

そういうと女子トイレにかけこんだ

「トランスコード　ハープ・ノート！」

～ルナ視点～

「あらスバル君は？」

「スバル君なら用事があるってさっきでていったよ」

「・・・ミソラちゃんは？」

「さっき教室を急いでていったぜ」

「しょうがないわね・・もう一人の転校生は？」

「終わった瞬間どっかいきました」

「なんなのよ！　もう！　スバル君の居場所は！！」

「えーと「ブロロッ　ロックなら校門付近にいるぞ」

上から順にツカサ　ジャック　キザマロ　ゴン太（オックス）がルナの質問にこたえた

「追いかけるわよ」

みんなルナからでている黒いオーラにおびえて黙ってしたがった

第9話　用事（後書き）

次回　オリジナル設定です

第１０話　コダマ山（前書き）

学祭つかれた～　足いて～

第１０話　コダマ山

～ミソラ視点～

ミソラはスバルをみつけるとウェーブロードの上でスバルを追いかけた

すると校門にたっている神上シンがみえスバルは神上シンにちかづいた

お互いなにも話さずただ目をあわせると一緒に歩きだした

「あれ？　あの二人知り合いなのかな？」

「けどあの子　転校生でしょ？」

「う～ん　とりあえず追いかけてみよう」

「よかったわね　告白じゃなくて」

「もう！　ハープ！！」

その後もスバル達はなにも話さずただ一緒に歩いていた

「どこ行くんだろう　この方向スバル君のおうちじゃないし展望台でもない　ハープどう思う？」

「さ～～」

するとスバル達はなんと山のなかへはいってしまった

「あら？　ここウェーブロードつながっていないわ」

「山のなかに入ちゃった・・　歩いておいかけよう」

そういうとハープ・ノートはウェーブロードからおりてあるきだした

～ルナ視点～

「ゴン太こっちであっているのよね」

「えっと・・「ブロロ　そうだぜ」

ゴン太のかわりにオックスがこたえた

「ブロロ　この奥だ」

「ここって・・・コダマ山じゃない！」

「どうした委員長」

「コダマ山は地元の人間なら絶対はいらないところなんです　みんな道に迷っておりるのに3日はかかるっていいますから」

キザマロがいった

「？ただの山だろ　普通におりればいいだけだろ」

「私もしらないわよ！」

「じゃあ何で地元のスバルが入ってるんだよ」

「ブロロ　なんかロックのほかにハープともうひとつ周波数をかんじるきがする・・」

「なんですって！　スバル君とミソラちゃんが一緒ですって！！」

委員長はオックスの後半のはなしをきいていなかった

彼女にとって重要なのはスバルとミソラが一緒にいるということだ

「こんなところでなにしてるんだろ？」

「追いかけるわよ」

「えっ　でも委員長ここはコダマ山で・・」

「おだまり！！　だまってついてきなさい！！」

第１０話　コダマ山（後書き）

主人公が一言もはなしていない！！

第１１話　転校生は何者？（前書き）

学祭　足いたいけどたのしかったな～
時間もどせないかな～

第１１話　転校生は何者？

「さっきから平坦な所がつづいててどこから来たのかもわからないのにあの二人よく迷わず進んでいるね」

「しかもここ電波環境わるくて周波数をかんじとれないわ　スバル君を見失ったらアウトよ気をつけてミソラ」

しばらく登ると少しひらけた所がみえてきた　そしてその中央に一本のおおきな木があった

二人はバッグをその木のそばに置くとやっと話し始めた

「おしっ　始めるか」

「うん・・」

ミソラは電波変換をとくと近くの木に隠れた

「なにが始まるんだろう？」

「さあー？」

そして二人はいきなり喧嘩を始めた

「えっ何で何で！？　けんかが始まちゃったよ！　スバル君大丈夫かな！？」

「落ち着きなさいミソラ　よく見なさい二人ともパンチとかしてる

けどどっちもあたってないわ」

「えっ？」

よく見ると確かに動きがはやくて（人間の範囲で）わかりにくいがどっちも攻撃があたっていなかった

左右に動き攻撃をくりだすあたらなければ相手の攻撃をガードする攻撃方法もさまざまだった　ふところに潜りこんで間近から攻撃したり　立ち回り真横からひじをつきだす等いろいろあった

「なんか・・かっこいい・・・」

ミソラは二人のかんせいされた動きに見入っていた

だが戦いは長く続かなかった

スバルが腕を前にだしたとき神上シンに引っ張られしりもちをついた

そこに神上シンの右ストレートがはいる

「あっ！」

だが攻撃はあたらなかった　神上シンは顔にあたる寸前でとめていたからだ

神上シンはニッと笑うとスバルに手をさしだした　スバルも微笑みながらその手をつかんだ

「久しぶりだな！！　スバル！！」

「久しぶり！！　シン！！」

・・・えっ？

第１１話　転校生は何者？（後書き）

スバル君キャラ崩壊（恋愛ではなく）ごめんなさいけど・・・やっとおもしろくなってきた！

第１２話　その正体は（前書き）

だいたい予想がつくというかた多いと思います

第１２話　その正体は

ちょっと待って　ついさっきまでけんかしてたのに
理由わかんないけどけんかしてたよね
「そうだブラザー結ぼうぜ」
「うん　いいよ」
ちょっと待って　私とブラザー結んだとき私泣いたよ
そんな軽くていいの
「ところでさスバル聞きたいことがあるんだが　さっきから木の後ろに隠れてるやつだれだかわかるか？」
「えっ」
「ミソラだな　ハープの周波数がする」
「・・・ミソラちゃん？」
ミソラは隠れても仕方ないとおもい素直にでてきた
「・・・はい」
「どうしてここに？」

「スバル君がどこいくのか気になってついてきました・・」

「この子だれ？」

「えっ！？　知らないの！」

「はじめまして響ミソラです　スバル君の初めてのブラザーです」

「へ～　君が・・」

「あの～　スバル君とはどういう関係なの？」

そう尋ねるとシンはニッと笑ってこういった

「はじめましてスバルの幼馴染の神上シンで～す」

「ええーーー！　スバル君の幼馴染！？」

ミソラは腹のそこから驚いた

「でもなんで二人ともけんかしてたの？」

ミソラがそう質問するとスバルが話し始めた

「それはね僕たちが小学1年生のころ・・・今から5年前くらいになるかな」

第１２話　その正体は（後書き）

次回　スバルとシンの過去があきらかに！

第１３話　二人の過去（前書き）

結構時間があくと思ったんですが
なかなかうまくいきませんね・・・

第13話　二人の過去

二人が始めて出会ったのは小学校にあがる前・・5歳のときだった
神上シンもコダマタウンに住んでいて二人は公園で出会った
「なにしてるの～？」
最初に話しかけたのはシンからだった
「えっと・・お城つくってんだ君なまえは？」
「僕　神上シン　きみは？」
「星河スバル！　一緒にお城つくらない？」
「うん！」
それから彼らは毎日のようにあそんびコダマ山をかけまわった
やんちゃ二人組みとしてもコダマタウンではよくしられていた
だが小学1年生の春のおわり
神上シンはコダマタウンから引越しをしなくてはならなくなった
引越しの前日かれらはコダマ山の頂上にある大きな木のしたにいた
「・・・僕　引越しするんだって」

「・・・うん」

「・・・島に行くんだって」

「・・・もう会えないの？」

「・・・・」

「・・・・」

二人とも黙ってしまった

離れたくないとおもっているのは二人とも同じだった

だがこれは逆らいようのないことだった

バシッ

シンはいきなりスバルをなぐった

「！　なにすんのさ！」

二人はけんかをはじめた

二人とも野山を駆け巡ったせいか自然と体をきたえており本当に６歳かと思うけんかだった

スバルがシンの顔をなぐったあとシンがさけんだ

「引き分けだ！」

「え？」

「このけんかは引き分けだ！」

スバルは手をとめ話をきいていた

「僕たちのけんかは引き分けだ！　だからまたけんかをしてどっちが勝つか決めなくちゃいけない！　だから絶対会わなくちゃいけないんだ！　このけんかはまた僕たちを引き合わせるんだ！」

「！　うん！！」

そうして二人はわかれた

その後星河大吾がブラザーバンドを開発

1年後宇宙人と絆を結ぶため宇宙へいった

だが大吾は行方不明になり今に至る

第１３話　二人の過去（後書き）

シンが因縁がどうのこうの言ってたのはこういう理由でした

第１４話　赤いヴィザード（前書き）

だれかー！　感想を！

第１４話　赤いヴィザード

「っというわけなんだ」

「へ～そうなんだ　だからけんかしてたんだ　すごいね！本当に二人とも会ったんだから！」

「まあな　因縁が俺たちを引き寄せたのさ」

「だからこの木の下でけんかしてたんだ　なんかロマンチックだね」

「ハハ　ありがとうミソラちゃん」

「さて久しぶりにのぼってみるか　よっと」

そういうとシンは木に登っていった

よくみると木にはハシゴがついていて上のほうにはちょっとした足場もあった

「僕も登ろ！」

「え？　待ってよ～」

木を登るとそこから今までとは違う景色がみえた

「うわ～～～　すご～～い」

そこから見える景色はコダマタウンを一望できる場所だった

「懐かしい景色だ・・」

「うん　僕もロックと出会う前はここにも結構きてたけど最近はずっときてなかったな」

「ロック？」

「俺のことだぜ」

そういうとロックが勝手にでてきた

「わっ　勝手に出てきちゃだめだよロック」

「そんなことよりも・・お前から懐かしい周波数をかんじるんだが」

「あら　ロックも気づいてたの？」

そういうとハープもでてきた

「あ　ハープ」

「へ～こいつらがお前らのヴィザードか元宇宙人の」

「「「「えっ？」」」」

二人と二体は耳を疑った

「なっなんで知ってんの！？」

「てめー何者だ！」

「これを見ればわかるよ　ヴィザード　オン」

「ふふ　久しぶりですね　ウォーロック　ハープ」

その声がすると赤く刀を腰にさしたヴィザードがあらわれた

「「オリオン！？」」

第１４話　赤いヴィザード（後書き）

次回　赤いヴィザードの正体があきらかに・・なる？

第１５話　そのわけは？（前書き）

今日で二話目でーす

第１５話　そのわけは？

「あなたどこ行ってたのよ！」

「どこ行ってたってどういう意味だハープ」

ロックがハープに質問した

「こいつ私たちと一緒にあなたを捕まえるため地球に来たけど途中でいなくなったのよ　もう死んだかと思ったわ」

「実は・・・」

「あ～待て待て」

オリオンが今まさに話そうとしたところをシンがさえぎった

「その話はまた今度にしよう　何度も話すのはめんどうだからな」

「そっそうですか・・」

「・・そういえばこの子みたことあるな」

シンはミソラのことをいっている

「思い出した！　確か俺と同じで転校してきた子だ」

「そっち！？」

「違うの？　う～ん」

「・・いまどきミソラちゃんを知らないなんて」

「スバル君も最初会ったとき私のこと知らなかったけどね」

「うっ　・・・ごめんなさい」

「まあだからブラザーになれたと思ってるけどね♪」

その間もシンは悩み続けていた

「う～ん　響ミソラ・・あっこの前ラジオで好きなタイプはあっさ

「あーー！！言っちゃだめ！！」

ミソラはシンの話をさえぎった

「？　なんの話？」

「スバル君はしらなくていいから！　そっそれよりも早く帰ろうよ」

「それもそうだね帰ろうか」

そうして3人は山をおりていった

第１５話　そのわけは？（後書き）

神上シンの性格は基本めんどくさがりでおおざっぱ　けど重要なときはたまにまじめになる

ミソラが好きなタイプ　それはアニメではあっさり系だそうです

次回　忘れかけているあいつらがちょっとだけでてくる！

第１６話　迷い人（前書き）

ちょっとではなくおもいっきりでした

第１６話　迷い人

「二人ともよく迷わないで進めるね　私登るとき二人についていかなかったら迷ってたよ～」

３人は今コダマ山をおりている

「まあね　小さいころよくここで遊んでいたから」

「けどここコダマ山は本当は一度入ったらなかなか出られない迷いの森として有名なんだぜ」

「へ～　何で迷わず進めるの？」

「それは「もう！ここどこよ！」あれ？」

なにやら前方から聞きなれた声がしてきた

「知るかよ！だいたいなんでお前らがわかんねーんだよ！地元だろ！」

「ここは危険だから入るなって小さいころからいわれてきたんだからわかるわけないでしょ！」

「平坦なところが続いていてどっちが上なのかわかりませんし　同じようところが続いていてどっちからきたのかもわかりません・・」

「無事帰れる確立・・７％！」

「上を見上げても木が生い茂っていてどっちが頂上かもわからないね」

「ブロロ　電波環境も悪いからロックたちの居場所もわからん」

「おまけにどこかけても電話つながらない・・腹減った」

上から順にジャック　ルナ　キザマロ　ペディア　ツカサ　オックス　ゴン太の声が聞こえた

「「「「「「「完全に道に迷った」」」」」」」

「みんな何してるの？」

第１６話　迷い人（後書き）

今日で３話目で～す
暇なのかって？ひまだよ～～今日だけ

第17話　人に会えるよろこび（前書き）

展開おそいな・・俺

第17話　人に会えるよろこび

「「「「「スバル（君）！！」」」」」

5人がいっせいにスバルをみた

「うおーー！スバルやっと会えた！」

「もう誰とも会えないかと思いました！」

「どこいってたのよ！！」

「よかったぜ～　こいつらと遭難なんていやだからな」

「ミソラも一緒だね　もう一人は・・・神上君だっけ」

ゴン太　キザマロ　ルナ　ジャック　ツカサはそれぞれの反応をみせた

「何してんの　こんなところで？」

「どーもこーもないわよ！　あなたとミソラちゃんをおってたのよ！」

「こいつら誰だ？」

シンはそうつぶやいた

「あらあなた・・・神上君だっけ」

「なんで俺の名前しってんだ？」

「私の名前は白金ルナあなたと同じクラスの学級委員長よ委員長ってよんで　後ろにいるでっかいのとちっこいのがゴン太とキザマロ　やさしそうなのと柄がわるそうなのがツカサ君とジャックよ」

「誰が柄が悪いだ！」

「最後の二人はしってる　同じ転校生だからな」

「それでなんで3人はこんなところにいるの？　そもそも初対面じゃないの？」

「あ～改めましてはじめましてスバルの幼馴染の神上シンで～す」

「「「「「えっ？」」」」」

「スバル君に幼馴染がいたの！？・・・じゃあなんであなたたちここにいるのよ」

「えっと・・私はスバル君のあとを追って見つかって・・」

「ぼくとシンは「ケンカしてました」

途中シンがいった

「「「「「えーーー！！」」」」」

第17話　人に会えるよろこび（後書き）

短いな～

次回！衝撃事実発覚！？

第18話　新事実（前書き）

明日　投稿できるかな？

第18話　新事実

「けんかってスバル君　大丈夫なんですか！？」

「・・・どっちもけがはしてないみたいだな」

「私スバル君たちのケンカみてたけど二人ともとってもかっこよかったよ～」

「へ～　僕もみてみたかったな～」

「・・・はっ　そんなこと言ってるばあいじゃなっかたわ！　私たちもう家に帰れないかもしれないのよ！？」

「大丈夫だよ委員長　こっち」

そういうとスバルとシンはあるきだした

それに6人もついていく

「スバル君　あなたどこが出口だかわかるの？」

「うん　ほら見えてきたよ」

しばらく歩くともといた道にもどってきた

「うおーー！　戻ってこれた・・・本当に戻れた」

「そうですねゴン太君・・・へたしたら今日は野宿でしたからね」

ゴン太とキザマロはなんだか涙ぐんでいる

「確かにお前らがいなかったらずっと道に迷ってたかもしれないからな・・キザマロがここに入ったらでれないって言った意味がよーくわかった」

ジャックがつぶやいた

「それじゃあ帰ろうか」

6人は仲良く話をしながら歩いていた

「お前が引きこもり？　うそだ～」

スバルの過去をはなしているとシンはへらへら笑った

「・・・みんなの表情見る限りマジらしいな」

「うん・・・あっそうだツカサ君　ジャック」

「何かなスバル君」「なんだスバル」

スバルは照れくさそうにはなした

「僕と・・・ブラザー結んでくれないかな」

「スバル君・・・僕でいいなら喜んで」

「俺もいいぜ」

3人はハンターを前に出しブラザーを結んだ

「よろしくねツカサ君　ジャック」

「うん」「ああ」

「そういえが4人はどこに住んでるの？」

スバルはツカサ　ジャック　ミソラ　シンの4人に尋ねた

「僕とジャックはWAXAの宿舎にいるよ」

「俺はあそこのアパートだ」

そういってシンはビッグウェーブよりもむこうのすこしぼろめアパートをさした

「そっ　そう」

「私はもうすぐわかるよ♪」

「そっか　じゃあみんなまたね」

「「「「「「じゃあねー」」」」」」

６人はそれぞれの家に帰っていった

「それでミソラちゃんのアパートはどこ？」

「こっち～♪」

ミソラはきげんがよさそうに見えた

すこし歩くと青い屋根がみえてきた

「ここって・・・」

「スバル君　今日からお世話になります」

ミソラはぺこっと頭をさげた

第１８話　新事実（後書き）

やっとここまできたーー！

長すぎる～

次回！ミソラが涙　そのわけは！？

第１９話　お母さん（前書き）

しばらくはほのぼので

第１９話　お母さん

「「えーーー！！」」

スバルとロックは驚きの表情で大声をあげた

「ミソラちゃんそれ本当！？」

「ほんと♪」

「ってことはつまりこれから毎日ハープと顔をあわせなきゃいけないってことか！？」

「あら　呼んだかしらロック？」

「げっ　ハープ！　こっち来んな！」

「もう一度言ってごらんなさ～い」

「来るな～！」

そういってロックはハンターに逃げ込んだ

「本当に知らなかったんだねスバル君」

「・・・母さんと父さんは知ってるの？」

「うん　スバル君のお母さんに一緒住まわせてくださいってお願いしたらＯＫしてくれて　スバル君には内緒にしとこうってなったん

だよ」

「ちょっと待ってミソラちゃん取り消しは「おじゃましま～す」僕の話は無視！？」

ミソラはすたすたと家にはいってしまった

「ハ～～」

「くそ～なんでハープまで・・・」

「とりあえず母さんに話をきいてみよう」

スバルも家のなかにはいっていった

「遅かったわねスバル」

ちなみに今日は始業式だけだったので本来であれば昼の１２時ごろにかえってくるはずだが今は午後１時になっている

「母さん！どうしてミソラちゃんがうちに住むっていわなかったの！」

「それより先に言う言葉は？」

「・・・ただいま」

「よくできました」

「母さん！どうしてミソラちゃんがうちに住むっていわなかったの！」

「だってスバルがどんな顔するか見てみたかったんですもの～」

「・・・それだけ？」

スバルは自分の母親に対してうなだれた

「あの・・・今日からお世話になります」

「ミソラちゃん　あなたは今日から私たちの家族なのよ　そんな堅苦しいあいさつはなしよ」

「えっ　でも・・」

「それと私のことはお母さんってよんで　私もミソラってよぶから」

「ひっく・・ありがとうがざいます・・」

ミソラは顔を隠し涙ぐんでいた

するとあかねはミソラを抱きしめた

「これまで辛いおもいをたくさんしてきたんでしょう？　スバルから聞いたわ　あなたのお母さんには役不足かもしれないけど私もがんばるから　ね？」

「ぐすっ　はい！」

スバルは黙ってその暖かい二人のやりとりをみていた

第１９話　お母さん（後書き）

スバルのお母さん　優しい人ですね・・・

次回！　次回スバルの部屋でなにかがおきる！（おきねえよ！）

おまけであいつの生活ものぞいてみよう

第２０話　それぞれの新しい家（前書き）

いったいなんだったんだ・・
どこからか声がきこえてきた・・

第２０話　それぞれの新しい家

「へ～ここがスバル君の部屋か～　ちゃんと片付いてるね～」

昼食を終え今スバルとミソラはスバルの部屋にいる

「私　初めてだな～」

「そうだっけ　確かツカサ君と戦ったあとミソラちゃん来たとおもうけど」

「え？・・・あ～ブラザーきられたときだったね」（流星１で確認してね）

「うっ・・・ごめんなさい・・」

「いいよ　私もスバル君とのブラザーきったことあるし」

「けどそれは僕のためだったでしょ？」（流星２で確認してね）

「まーそうだけど・・・もうこの話はおわり！」

そういうとミソラは本棚をながめた

「う～ん　やっぱり星に関するものが多いね」

「うん　好きだからね」

「あっ」

ミソラは本棚のわきのほうになにかをみつけた
それはミソラがだしたアルバムのCDだった　どれも保存状態がよくすべてそろっていた
「スバル君こんなに私のこと応援してくれてたんだ」
「え？・・あ～見つかちゃったか　そりゃそうだよミソラちゃんは初めてのブラザーだし・・・感謝してるんだ・・あそこから一歩ふみだせたと思ってるし」
「スバル君・・・」
「あっ下から飲み物もってくるよ　待ってて」
そういうとスバルは部屋からでていった
「ミソラ」
「ハープ・・・」
「あなたいつ告白するの？　さっきはタイミング逃しちゃったし」
ハープが言ってるのは学校で屋上にきてほしいというやつだ
「うん　だってスバル君　シン君と会ってたんだもん」
「でもよかったんじゃない　スバル君の意外な一面をみれて　彼いがいと肉食系なんじゃない？」

「にっ肉食系スバル君・・・」

そういうとミソラは顔を赤くし顔からボッとけむりがでた

「いっ　いいかも・・・」

「なに想像してるの？」

「ミソラちゃんりんごジュースとオレンジジュースどっちがいい？・・・って何で顔あかくなってんの？」

「べっ別になんでもないよ！」

「？　そう」

～一方そのころ～

「は～やっとおわった～」

そのころシンは引越しの片付けを終えていた

といっても元々荷物が少ないので2時間ほどでおわったのだが

「なにか飲み物ねーかなー？」

小さめの冷蔵庫をひらいてみたが何もなかった

それもそのはず引っ越してきたばかりで飲み物もなにも買っていないのだから

「は～　買い物いくか～　夕飯もつくんなきゃいけないし・・」

だがしばらくして重要なことに気付く

「・・・スーパーどこだっけ？」

第２０話　それぞれの新しい家（後書き）

は～　レポートとかいっぱいある～

次回！　星河一家全員集合！

第２１話　楽しい夕食（前書き）

今日どれくらいできるかな

第２１話　楽しい夕食

スバルとミソラは部屋でなんでもないような話をしてもりあがっていた

学校のこと　友達のこと　今までのことなどを・・

そして気づいたら夕日も沈みかけていた

「ただいまー」

「あっ　父さんだ行こうミソラちゃん」

「うん！」

星河スバルの父親　星河大吾は宇宙から無事かえってきて今はＷＡＸＡで働いている

「おかえり　父さん」

「ただいま　スバル」

「おかえりなさい　おっお父さん」

ミソラはすこし顔を赤くしていた

「ただいま　ミソラ」

そういうと大吾はミソラの頭に手をのせた

「ミソラ　君はもうこの家の家族なんだ　遠慮することはないからな」

「ぐすっ　はっはい！」

ミソラは自分をこんなにも暖かくむかえてくれる星河家に涙をながした

～夕食～

「しかしスバルにこんなかわいいブラザーがいたとわな！　すみにおけないなスバル！」

「とっ父さん／／／」

「／／かっかわいい・・／／」

ミソラは顔をあかくしながら食事をしていた

「ところで二人は付き合ってるの？」

「／／！！／／」　「！ケホッ　ケホッ」

ミソラはさらに顔をあかくしうつむいてしまった

スバルはむせている

「母さん！　いきなり何をいうのさ！」

「あら違うの？　ミソラは？」

「付き合って・・・ないです・・」

ミソラはか細い声で言った

「そう」

「もう！ごちそうさま！」

スバルはその場から逃げるように階段をあがっていった

「ミソラ　あなたはスバルのことどう思う？」

「どうって私・・・」

「好きなの？」

「・・・はい・・」

ミソラはかなわないと思い素直に言った

「そう　がんばってね応援するから」

「！　はい！ごちそうさまでした！」

ミソラはスバルを追って階段を上がっていった

「俺がいない間にスバルはほんと成長したな」

「ええ　あなたに似てね」

星河夫妻はあたたかく二人をみていた

～そのころ～

「あ～　スーパー探すのにてまどった～」

「コダマタウンに住んでたんじゃないんですか？」

オリオンはあきれながら言った

「小学1年生がスーパーの場所わかるかっての」

そういうと腕まくりをした

「さて　はじめますか」

第２１話　楽しい夕食（後書き）

今日たぶんもう１話いけます

次回！ついにミソラが！

第２２話　展望台（前書き）

糖分高めで！

第22話　展望台

「展望台いってきま～す」

「あっスバル君　私も行っていいかな？」

「えっ　うんいいよ」

「「いってきまーす」」

「いってらっしゃい」

二人は家をでて肩を並べ歩いている

「ミソラ　あなた告白するんでしょ」

「ハープ・・・」

ハープとミソラは声を小さくして話している

「大丈夫　きっと成功するわ　じゃまものロックは私が黙らせておくから」

「ハープ・・・うん！」

話がおわるとハープはスバルのハンターに入っていった

「なっハープ！何してやがる！てめっさっきも「黙って気絶してなさい！」グフッ」

「あれ　ロックどうしたの？なにか声が」

「・・・・・・・」

「寝ちゃったみたいね」

「あ　あはは・・」

ハープが平然と言ったのにたいしミソラは苦笑いするしかなかった

展望台につくとスバルは星を見上げたまま黙ってしまった

ミソラも黙っていたがスバルとは違う理由だった

「（う～ん　どうやってきりだせば・・・）」

「（ミソラ！　あなたにやってんの！）」

「（そんなこと言われてもどうやって言い出せばいいか・・・）」

「（もう！いいわよ私がやってあげる！）スバル君　ミソラが大切な話があるそうよ」

「ハープ！？」

「なに？　ミソラちゃん」

第２２話　展望台（後書き）

今回　短い・・・　そしてロックが静かなのはこういう理由です

次回！もうわかるよね！（だったら書くな！）

第２３話　告白（前書き）

また聞こえた・・・

そんなことより今日で３話目！

第２３話　告白

「すっスバル君って好きな人とかいるのかなっ」

「好きな人！？　う～ん」

スバルは少し考えたそぶりをみせた

「あんまし考えたことないからわかんないな」

「そっか・・・よし」

ミソラは深呼吸をすると大きな声をだして言った

「私　スバル君のこと好きです！　付き合ってください！」

「・・・へ？」

スバルは一瞬理解できず変な声をだした

だが数秒かかって告白されたのだと理解すると

「えええーーーーー！！！」

「（いっ言ちゃった・・）」

「ほっ本気！　ミソラちゃん！」

「・・・・はい」

ミソラは顔を赤くしうつむきながら言った

「ぼっ僕でよければ喜んで・・・」

「・・・ほんと？」

「ほんとだよ」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんとだよ」

スバルはほんの少し顔を赤くしながらほほえんだ

「やったーーー！」

そういうとミソラはスバルに抱きつきキスをした

「！みっミソラちゃん！」

「／／えへへ　今のファーストキスだよ／／」

ミソラはうれしそうにスバルの胸にほおずりをしていた

「（・・・スバル君って意外とたくましい・・やっぱ肉食系なのかな？」

「（ミソラちゃんかわいいけど・・・恥ずかしい・・）」

互いのことを思いながら抱き合うことで体を温めあっていた

～そのころ～

神上シンは食事をおえだれかと電話していた

「ああ　またな」

電話をきると寝る準備を始めた

だがあることに気付く

「あれ？　布団どこいった？」

「は～　しっかりしてください」

オリオンがあきれながらつっこんだ

第２３話　告白（後書き）

やっと告白シーンかけた・・・

次回！　また一騒動！

第２４話　寝床（前書き）

敵はいつになったらでるかな～

第２４話　寝床

展望台の帰りミソラはスバルの左腕に抱きついていた

「／／みっミソラちゃん　ちょっと離れて・・・／／」

「えー　いいじゃん付きあってるんだから」

「そりゃそうだけど・・・」

～スバルの家～

「「ただいま～」」

「おかえり　スバル　ミソラ　お風呂わいてるからどっちかはいって」

「ミソラちゃんお先どうぞ」

「じゃあお言葉にあまえて～」

そういうと着替えをとりに二階へあがっていった

「スバル顔赤いけどどうしたの？」

「べっ別になんでもないよ」

「ほんと〜？」

アカネがにやにやとしながら聞いてきた

「ほっほんとだよ」

「じゃあミソラに聞いてみようかしら」

「！それはだめ！」

「なにしてんの？スバル君　お母さん」

すると着替えをとりにいってもどってきたミソラが聞いてきた

「あっミソラ　スバルと「別になんでもないよ！」

スバルが途中でさえぎった

「？　そう」

ミソラはそういうとすたすたと風呂場へいった

「もう母さん！ミソラちゃんとは何もないから！」

そういうとスバルは二階へあがっていった

「ふふ　ばればれよ♪」

ミソラとスバルは風呂からあがり今二人はスバルの部屋で寝る準備をしてる

「そういえばミソラちゃんはどこで寝るの？」

「どこって・・・ここだよ」

ミソラは当たり前のように言った

「ここって・・・僕の部屋？」

「うん　もちろん」

「ええーーー！まずいでしょそれは！」

「大丈夫だよ　それともスバル君は私にソファーで寝ろとでも言うの？」

「いや　そういうわけじゃないけど・・・」

「じゃあいいよね」

「・・・はい」

スバルはしぶしぶ首をたてにふった

「でさスバル君お願いがあるんだけど・・・」

「？　なに？」

ミソラはもじもじしながら言った

「一緒に・・・寝ない？」

「！だめに決まってるでしょ！」

「お願い！」

「だめ！」

「（こうなったら・・）どうしても？」

ミソラは上目使い＋涙目でスバルをみた

「うっ・・・わかったよ・・」

「やった～」

とびらのむこうでは

「ふふ　いいこと聞いちゃった～♪」

そういうとアカネはしずかに階段をおりていった

「大吾さんにも言っちゃお♪」

屋根の上では

「なあハープ俺たちいつまでこうしてりゃいいんだ？」

「黙ってなさいあなたは！これからがおもしろいところなのよ」

「おもしろいのか？」

第２４話　寝床（後書き）

ハープとロックが静かなのはこういうわけです
これから二人とも出番すくなさそうだな～

次回！１日目終了！

第２５話　夢（前書き）

書くことが・・・ない！（だったらかくな！）
あっ　ちなみに前書きがですよ～（黙れ！）

第２５話　夢

「スバル君はやく！」

「みっミソラちゃん本気！？」

ミソラはスバルを引っ張りベッドへ連れて行こうとしていた

「本気だよ　ほらっ！」

スバルをベッドに押し込むと自分もはいりスバルの左腕に抱きついた

「みっミソラちゃん恥ずかしいから離れて・・・」

「えー　付き合ってるんだからいいでしょ　これくらい慣れてもらわなくちゃ」

そう言うとスバルの肩をまくらにねてしまった

「・・・zZ」

「はやっ！・・・は～僕も寝よ」

「珍しいわね　ミソラがこんな早く寝るなんて」

「あっハープ・・・ロックどうしたの？」

「聞くなスバル・・」

「そう・・」

「ミソラはスバル君がいると安心できるのね」

「う～ん　そうなのかな～？」

「そうよ　ミソラはこんなに早く寝なかったもの」

「へ～」

「じゃあ私たちも寝るわね　おやすみスバル君」

「おやすみハープ　ロック」

「おう」

2体はそれぞれのハンターに戻っていった

「僕も寝よ」

～1時間後～

「（眠れない・・・）」

スバルは寝ることができないでいた

なぜなら少し横をむくとミソラの寝顔があるからだ

「（かわいい・・・ってそんなことを言ってる場合じゃない！）」

は～とスバルはため息をついた

そのときどこからか声が聞こえてきた

「ぐすっ　ママ・・・どこ？」

「？　ミソラちゃん？」

声の主はミソラだった

ミソラは涙を流しながら寝言を言っていた

「やだよ・・・いかないで」

「ミソラちゃん・・・」

スバルはミソラの頭に手をのせ静かに言った

「大丈夫・・・ママはいないかもしれないけど僕が・・・みんながいるよ　泣かないで」

「スバル・・・君」

そういうとミソラは安らかな表情になっていった

スバルはそれを見届けたあと自分も寝た

夜があけていく

平穏という名の夜が・・・・

番外編　その1

ども～　作者で～す

いや～　やっと1日目終了しました　長いね～

題して　1日目終了記念！

そんなわけで今回は星河一家にきてもらいました～

「どうも星河スバルです」

「星河あかねです♪」

「星河大吾です」

「響ミソラで～す」

「え？　なんでミソラちゃんまでいるの？」

「なにいってるのスバル　ミソラちゃんは家族の一員でしょ」

そのとおり！　なにを馬鹿なことをいってるんだスバル君

「いやだってミソラちゃん星河じゃないし・・」

「今星河じゃだめだろ　養子とじゃ結婚できないからな」

「「／／／／／／」」

まあそんなラブコメはここではよしてくれ

小説でいっぱいやると思うから

「ほんと！」

ほんとだよ　それにスバル君のかっこいいとこ見たいよね？

「見たい見たい！」

よし任せとけ！　だからここでは別の話をしとこう

題して！　流星のみんなに質問！コーナー！

いや～　第1章始まりの朝　がやっとおわったわけだけど・・・

（はじめて聞いたぞ！）

おっお前は・・いったいどこから！　ここでは俺が呼んだ人しか来れないのに！

そもそもだれなんだ！

（俺か？　俺は読者の声だ馬鹿野郎）

読者の声だと・・・

（そうだ俺は読者のがわからお前につっこみをするためでてきた）

まあそんなことはどうでもいい

星河一家へ　この小説どう思いますか？

「スバル君がけんかしてるのに驚いた！」

「ほんとだよ　まさかこんなことになるなんて・・」

「我が息子も成長したもんだ・・・」

「ええ　そうね大吾さん」

「しみじみしないで父さん　母さん」

いや～　俺としてはスバル君をかっこよくやりたかったからさ～

どうしても草食系っていうイメージだからさ

「・・・なんかシンと同じにおいがする・・もしかして自分も登場したかったからシンをだしたんじゃ・・・」

ギクッ・・・そんなことより次回！

「ごまかした！」

第2章　戦いのはじまり

彼らはなぜ戦うのか・・・・

「そもそも第1話目のシンのところもいれて1日なの？」

・・・・・お楽しみに！

「またごまかされた！」

第２６話　幸せの朝（前書き）

おそくなりました～

第２６話　幸せの朝

次の日の朝　ミソラは少し早めに起きていた

仕事のかんけいで早く起きる習慣がついていたのだ

「ん～～～！よく寝た～～～～！　あっ　スバル君の隣で寝たんだっけ」

スバルはまだ気持ちよさそうに寝ていた

ミソラは少し考えるそぶりをみせると再びスバルの腕に抱きついた

「もう少しだけ・・・」

～1時間後～

「スバル～　ミソラ～　起きなさ～い」

「おっお母さん・・・」

ミソラは約1時間スバルに抱きついていたのだ

「あら～　こんな朝早くからなにをしてるのかしら♪」

「そっそれは・・・」

「ふふ　付き合ってるのなら当たり前かしら」

「！　なっ何で知ってるんですか！」

「あら　ばればれよ　それと敬語はだめね　あと早くスバルを起こしてきてね」

そういうとあかねは部屋をでていった

「ばればれ・・・」

「おはようミソラ」

「あっハープ　ロックくんも」

「朝から幸せそうねミソラ」

「？　あれが幸せなのか？　ただくっついてるだけじゃねえか」

「もう　何でわからないのよ」

ミソラはほんのり顔を赤くしていた

「そんなことより早くスバル君を起こさないと　学校遅れるわよ」

「スバルはなかなか起きないぞ・・・昨日はあんな早く起きたのに・・・」

「スバル君　起きて」

ミソラはスバルの肩をゆする

しかしまったく起きる気配がない

「こうなったら・・・」

そういうとミソラはスバルにキスをし続けた

「！　んーーー！　ぷはっ！」

「おはようスバル君」

「おはようって・・・ミソラちゃんもしかして・・・」

「スバル君が起きないのが悪いんだも～ん　それより早く行こうお母さんたちが待ってるよ」

「・・・はぁ～」

スバルは深いため息をついた

朝食を食べているとき

あかねと大吾は朝あったことをさんざんからかっていた

それに対しスバルとミソラは顔を赤くしながら朝食をたべていた

第２６話　幸せの朝（後書き）

うらやましいですね～

次回！・・・も日常！

第２７話　二人だけの（前書き）

さあ　はりきっていきましょう

第27話　二人だけの

なんとか朝食を食べ終えたスバルとミソラは学校に行く準備をしていた

そこでスバルはあることに気付く

「・・・ミソラちゃんがここに住んでいることを委員長たちは知らない・・・」

そして付き合ってることも・・・

「どうしたのスバル君」

「ミソラちゃん相談があるんだけど・・」

「なに？」

「僕たちが付き合ってることは内緒にしてもらえないかな」

「なんで？」

「えっと・・・」

ここで委員長が怖いからと言ったらどんな顔をするだろう・・

しかしスバルはあることを思いつく

「ふっ二人だけの秘密にできないかな？」

「!?　二人だけの秘密・・・うん!そういうことならいいよ!」
スバルは安堵のため息をついた
しかし本当の地獄はこれからだ・・・
「スバルー　ミソラー　委員長さんたち来たわよ～」
「「は～い」」

～スバルの家前～
「「おはよう」」
「「「「「おはっ!」」」」」
いつもの3人組＋ツカサ＋ジャックは朝のあいさつを最後まで言うことができなかった
「なっ何でミソラちゃんがスバル君の家から出てくるの!」
「私ベイサイドシティーからじゃ遠いからコダマ小学校から近いスバル君の家に居候させてもらってるの」
「・・・別に私のいるマンションでもよかったんじゃない?」
「スバル君のお母さんに相談したらうちに来なさいって言ってくれたから」

「・・・・」

ミソラから言われて何もいえなくなったからか背中から黒いオーラがあふれでてるように見えてくる

「にっ逃げろーーー！」

スバルはその場から逃走した

「あっ　待ってよ～」

ミソラはスバルを追いかける

「待ちなさーい！」

それをさらにルナが追いかける

「「「「・・・・」」」」

残された4人は何も言わず3人を追いかけた

第27話　二人だけの（後書き）

いや～　テストも近くなってきました
この間終わったと思ってたのに・・・

次回！　コダマ小学校で事件が！

（ほんとか～？）

第２８話　教室の前の一騒動（前書き）

今日２話目！

もうドバー！っとやっちゃいます

第２８話　教室の前の一騒動

「は～　何とか逃げ切った」

「もう　スバル君おいてくなんてずるいよ～」

今スバルとミソラはエレベーターでルナをふりきり教室に向かっている

「？　スバル君　教室の前に人がいっぱいいるよ」

たしかに教室前廊下をみてみるとドアの前に人だかりができている

「どうしたの？」

「あっスバル　いや実はドアがまったく開かないんだよ　なんでかわからないけど」

ためしにスバルもドアを開けようと試みたがまったく開くようすがない

「う～んどうしよっか　もう少しでチャイム鳴っちゃうよ」

「スバル君！！　あなたよくも・・・あらどうしたの？」

やっと委員長たちも到着したようだ

「ふ～ん　ドアが開かないの　ゴン太何とかしなさい」

「おっおう」

ゴン太も挑戦してみたがドアはびくともしなかった

「だっだめだ・・」

「もう！　だらしないわよ！　早く開けなさい！」

「いや～　あぶねーあぶねー　遅刻するとこだった」

「あっ　シン」

シンもぎりぎりで到着した

「？　どうしたスバル」

「じつは・・・」

「ふ～ん　かしてみろ」

そういうとシンはゴン太とかわった

シンは軽くドアが開かないことを確認してから足をあげた

バゴン！！

・・・ドアを蹴飛ばした

シンはニッと笑いながら言った

「俺に越えられない壁はない」

「・・・はっ　何してんのよ！！」

皆が呆然とするなかルナが一人つっこんだ

「このかさがつっかえてドアが開かなかったのか」

「人の話を聞きなさい！」

「待て待て委員長　何をしても開かないドア　それを開くようにした俺　どっちが悪い？」

「壊したあなたに決まってるでしょ！」

「ほらちゃんとはめれば・・・元通り　これで免罪だ」

委員長から黒いオーラが見えてきた

「人の話を聞きなさいと言って・・・あら？」

気付けばシンは窓にひじをかけていた

「あっ　ちょうちょだ～　春だな～」

「いいかげんにしなさい！！！」

ルナはシンのもとまで走っていくと大声で説教をし始めた

が　シンはまるでルナの話を聞いてるようすがなく

ただ外を目を細めながら見ていた

「すげえ・・・あの委員長をもろともしてない・・」

「確かに・・・あの委員長にまったく動じない人は始めて見ました・・・」

「そうだスバル　今日学校が終わったらＷＡＸＡに来てくれ　なにかはなしがあるらしい」

ジャックがスバルにいった

「あとミソラとゴン太もな」

「えっ　私も？」

「わかったぜ」

そのときチャイムがなった

「おっとチャイムだ　委員長はやく座らないと委員長の名が名折れするぜ～」

「ぐぬぬぬ」

シンから言われルナは何も言えなくなった

その後の授業の１時間目はルナから黒いオーラが見えクラス全員が話しかけることができなかった

・・・シンを除いて

第２８話　教室の前の一騒動（後書き）

このときおこった「越えられない壁はない」事件はコダマ小で永遠と語りつがれるのであった・・・

（くだらね～）

次回！事件の予感！
（ほんとかよ）
今度はほんと

第２９話　新メンバー（前書き）

３話目ですよ～

第２９話　新メンバー

学校が終わりスバル　ミソラ　ゴン太　ツカサ　ジャックの５人はＷＡＸＡに行こうとしていた

「みんな帰るわよ」

「悪い　委員長　俺たちＷＡＸＡ行かなきゃ」

ゴン太が言った

「ふ～ん　なら私たちも行くわよ」

「え？」

「あなたはルナルナ団の一員なんだからほっとけないでしょ」

「おっおう」

そうして６人はＷＡＸＡへ向かった

～ＷＡＸＡ前～

「久しぶりだねＷＡＸＡ」

「うん　メテオＧいらいだからね」

「入るわよ」

WAXAに入ってくと暁シドウとクインティアがいた

「よう　よく来たなみんな」

彼　暁シドウは実はグレイブ・ジョーカーの自爆をおさえるため犠牲になったのだが・・・

スバルが宇宙から帰ってきた次の日　ひょっこり帰ってきたのだ

暁が言うには遠くにとばされて帰ろうとしたのだが足を折っていたので時間がかかったそうだ

「久しぶりね　みんな」

彼女　クインティアもジャックと同じで暁シドウの保護のもと生活している

「こんにちは暁さん　クインティア先生」

「さっそくだけどみんなに話がある　今ここに遊撃隊を再結成することを宣言する！」

「いきなりですね・・・」

「さらに新メンバーを紹介する　入ってこい」

そういうとむこうの扉から見覚えのある人物がはいってきた

「ども～　神上シンで～す」

「！　シンなんでここに！」

「まあいろいろあってさ・・・ん？」

シンはルナとキザマロをみて顔をしかめた

「・・・なんでお前らいんの？」

「なによ　悪い？」

「悪いにきまってんだろ」

「なっ！！」

ルナはここにいることが悪いと平然に言われたことに驚きをかくせなかった

「まーまーおまえら　世間話はそのくらいにしてなぜ遊撃隊を再結成することになったのか聞いてくれ」

第２９話　新メンバー（後書き）

シンはまじめかふまじめかどっちでしょう

次回！　シンの過去があきらかに！

第３０話　クリムゾン（前書き）

ども～　お久しぶりです～
テストが近くなってまともに更新できませんが
温かく見守ってください

第３０話　クリムゾン

「最近　ヒールヴィザードによる事件が多発しているのは知ってるな？」

「はい　テレビで見ました」

「実はその事件の大半がウイルス異常発生なんだ
そしてその現場に残されていたのが・・・クリムゾン」

「「「！　クリムゾン！」」」

クリムゾンとはノイズが大量発生したときにできる赤い球のようなものだ

使い方によってウイルスを発生させることやヴィザードを暴走させることもできる

「ほんとなんですか！　それ！」

「本当だ　そして問題なのはここだ　そのクリムゾンが使われた現場から多くのクリムゾンが発生してどこかに吸い寄せられるようにどこかへ消えてしまったことだ」

「・・・なんかどこかで聞いたことがある話ですね」

「そう・・・ミスター・キングとまったく同じやりくちなんだ」

ミスター・キングとはメテオＧを使って地球を征服しようとした張

本人だ

「ミスター・キングが生きていることはまずありえない　そうだろう？スバル」

「はい」

「それなら俺も見たぜ」

「ロック・・・」

「あいつは確かにノイズの渦の中に落ちた・・・メテオGは特別だ　あそこじゃ俺たちも動きがとれなくなってくる　それにあの時の爆発のなかで生きているのはほぼ無理だ」

「つまりヒールヴィザードを操っているそいつは俺たちもまだ完全にわかっていないクリムゾンの技術をもっているということになる・・・　問題なのはここなんだ　キング以外の誰かが知っているとなるとまるで見当がつかない」

「キングがだれかに教えたという線はないはずよ」

そのとき扉のむこうから誰かがはいってきた

「あっ　ハートレスさん」

「久しぶりね　スバル君」

彼女の名はハートレス　メテオGをとめるためミスター・キングの秘書となっていた

今は彼女もＷＡＸＡで働いている
ちなみに星河あかねの親友だ
「ミスター・キングは誰かに自分が見つけた技術は絶対教えたりしない・・・私がやつのそばにいたときはクリムゾンの技術はどこにも漏らさないよう気をくばってたわ」
「つまりキング以外のだれかが自力でその技術を見つけたということになる・・・そしてそいつがクリムゾンの技術を世界に広まったらと思うとおそろしい・・」
「まだわかってないんですか？　クリムゾンのこと」
「ああ　現在ほかのＷＡＸＡとも研究をしているが・・まだミスター・キングにやられた機能の半分はまだ回復していない」
ミスター・キングはメテオＧを操るさいに世界中のＷＡＸＡを壊滅的状況にしたのだ
「そうなんですか・・」
「だから新たな戦いにのため再び遊撃隊を結成する　そしてスカウトしてきたのが神上シンだ」
「ども～」
シンはあまりにも場違いな声で返事をした

「実はスバルをスカウトしたときからこいつもスカウトしてたんだが断られ続けていたんだ」

「なんで断ってたの？」

「俺のいた紅葉島ではウイルスが大量発生しやすいんだ　だから俺がウイルスを退治してたんだよ　じゃなきゃ電子機器が壊れるからな」

「そこでウイルスの発生をおさえる装置を置くと言ったらＯＫしてくれたわけだ」

「おいこら！」

ロックが急にスバルのハンターからでてきた

「だめだよロック　急にでてきちゃ　みんな驚くよ」

「そんなことはどうでもいいんだよ！　前々から聞こうとしてたんだ！　なんでオリオンがここにいるんだ！」

その声に反応しシンのハンターからオリオンがでてきた

「はい　説明します　地球に来て何があったかを・・・」

第３０話　クリムゾン（後書き）

今回　長い～

次回！　オリオンになにがあったか！　邪魔するものはだれもいない

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4779x/

流星のロックマン～赤き太陽現る～

2011年11月20日01時13分発行